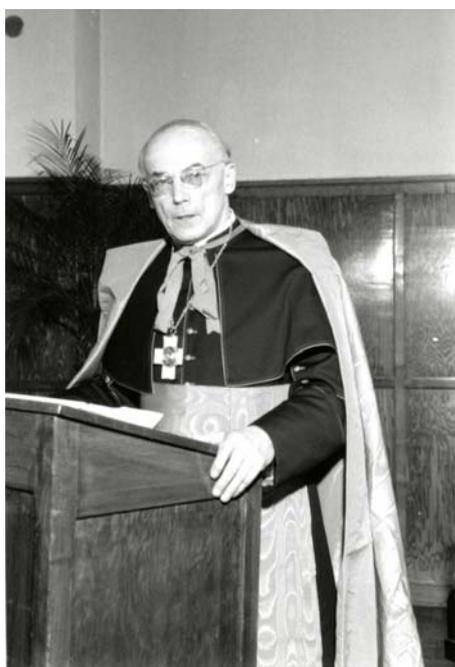


1. 西独フリングス枢機卿からの寄付によって創設

1957年に法学部法律学科が設置された。これには逸話が残っている。1955年に大泉孝学長がドイツのケルン教区の「東京週間」に出席しているとき、大司教のヨゼフ・フリングス枢機卿から、「上智大学には法学部がない。大学は神学、哲学、法学、医学がなければ総合大学とはいえない」と開設を要請されるが、大泉学長は「金がありません」と答えたら、



当時の図書館閲覧席の特別会場で挨拶するフリ  
ングス枢機卿

と答えたら、設立に要する半額を寄付していただいたという話が『上智大学 50年史』に載っている。



開学式で挨拶する大泉学長

新任教員 33 名を招聘し、総工費 1 億 4000 万円をかけて法学部校舎が 1957 年に竣工した。そして開学式が 5 月 11 日に旧図書館閲覧席で行なわれ、大泉孝学長が法学部新設の意義や目的を述べ、開設に多大の援助を惜しまなかった西ドイツのヨゼフ・フリングス枢機卿に名誉法学博士号を贈呈した。

2. 法学部の前身

法学部は、最初は 1932 年に専門部（法科）として開学している。専門部とは第二次世界大戦前の旧制大学の付属機関で、法的には大学令でなく専門学校令に基づくもので、いわば実学を主体としたもの

であった。上智大学でも法科のほかに経済科、商科、新聞学科が同時に専門部として開設している。専門部とは現在の専門学校とは性格を異にしたもので、1903年に発令された専門学校令に基づき、「高等の学術技芸を教授する学校」となっていた。入学資格は旧制中学校・実業学校卒業で、在学期間が3年。学士号は授与されなかったため、大学の学位を取得するには、旧制高校・予科などを経る必要があった。この専門部は戦後の1948年に廃止され、上智大学でも48年に募集停止、1951年に廃止されている。そして法学部法律学科は、新制の学校教育法に基づき1957年に新たに創設され、初代法学部長に寺田四郎教授が就任した。寺田教授は戦後焼け野原となった麹町通りの土地買収を、所有者板谷宮吉氏と粘り強く交渉し、戦後の上智大学の



拡張に貢献した人でもある。その年の12月には早くも学術雑誌の紀要『法学論集』が刊行されている。

法学部校舎は、地下1階、地上5階、延べ建坪1513坪。1・2階は教室や研究室、3～5階は個室の研究室で、各階30室、全部で90室があった。最初は法学部の研究棟だけでなく、文学部、経済学部、外国語学部の研究室をかねて1室2名であった。

### 3. 法学部に新たに国際的な2学科が誕生

上智大学法学部開設の目的は、「理論と実際に通ずる人材の養成」にあった。この目的は現在まで連続と継続しているものである。同時にフリングス枢機卿の「一言」が東京の四ツ谷の地に実を結んだことの功績は大きい。そこには「最初から物心両面にわたる国際協力があり、脈動する国際精神があった」と、法学部創設25周年を振り返って当時の法学部長大木雅夫教授は語っている。

こうした経緯と背景があつて、1980年には、法学部の中に日本では見られないユニークな国際関係法学科ができた。この学科は、上智大学の国際性の特徴を活かし、国際法や国際私法などの伝統的な法学部門だけでなく、国際関係の法分野を学科科目の中核とし、これと併せて外国法や国際的な政治・経済などを配置することで、将来日本の外交や国連機関職員を育成することを目指した。そして1997年に地球環境法学科が誕生した。この学科も地球規模で拡大する環境問題を法学の視点からアプローチする日本で初めての学科である。国内外の環境法関連の科目を多数配置し、自然科学や経済学、倫理学などの分野からも地球環境問題にせまろうとした画期的な学科となった。また特徴的なのは発展途上国からの留学生を積極的に取り入れて、特に途上国での環境問題、環境行政などに役立てようとするのも新学科の狙いであった。



一番手前が旧図書館、中央が最初は法学部校舎と称されていたが、後に旧図書館と併せて2号館と名称を改めた。1969年に7号館が完成すると文学部と外国語学部は7号館に移動し、文学部人間学研究室、法学部、経済学部の研究棟となり、1室1名の個室となった(写真は1960年頃)



旧図書館側から見た法学部校舎の館吹き抜きの渡り廊下